

『古事記』

岩波書店

学校の歴史の教科書には、我が国で最古の歴史書として紹介されています。712年に太朝臣安萬侶（オホノアソミヤスマロ）によって元明天皇に献上されました。今年は編纂1300年に当たります。古事記という名称は歴史の教科書の中で目にした人も多いのですが、中身についてはたいていの人は読んだことがないと答えます。確かに読んでいないかもしれませんが、読んでいとも言えるのです。天の岩戸、因幡の白兎、海幸彦・山幸彦、八岐大蛇（ヤマタノオロチ）、これらはみな古事記の中に収蔵されている神話なのです。ただし、これらの神話を個別に読んでいたとしても古事記を読んだことに気づかないのは、神話の間に存在する時間軸を理解していないからです。古事記はさまざまな神話や伝説を時間軸にしたがって整理した書物の集大成なのです。

古事記は神武天皇から始まる天皇の系統を説明しています。右側にかなり傾いた内容ですから、それは最初にお知らせしておきますし、それを納得してから読んでください。しかしながら、読み出すと大変興味深い世界が頭の中に広がっていきます。常に新しいものを世の中に提案していかなければならない、科学技術の世界で生きている、あるいは生きていこうという者にとって、何かしらの感性を与えてくれます。無から有をどのように生み出すのか、それをどう捉えるのか、1300年にわたって継続しながら伝えられてきたということは、それなりに理由があるわけです。つまり、この国の民族の多くが受け入れることのできる考え方、それが古事記に描かれているのです。

もともと何もなかった宇宙に天と地が分かれて出現します。そして天上界の高天原（タカマガハラ）に現れた天之御中主神（アマノミナカヌシノカミ）ら三柱の神は独神で目には見えませんでした。独神とは、男女の区別のない神という意味です。男女を作るとその男女はどこから生まれたのかという議論に発展するので、最初の神は独神なのです。その後、だいぶ後になって伊邪那岐命（イザナキノミコト）と伊邪那美命（イザナミノミコト）の男女神が現れます。男女神は人間の姿をしています。

古事記の世界にはたくさんの神々、すなわち八百万の神々が描かれています。我が国の民族が持つ特徴的な考え方です。一方、キリスト教、イスラム教、ユダ

や教などは一神教として知られています。この考え方の違いは双方の社会システムの違いに少なからず影響を与えています。例えば、古事記の中の神々は合議制でものごとを進めていきますし、ある神に困りごとのあるときには位の高い神々に相談に行くのです。こうすることによって、大きないざこざを予め避けようとする日本人の知恵を見ることができます。

伊邪那岐命と伊邪那美命の二神は、天上の天つ神の合議により、この国土を固定し、整備せよと命を受けます。そして天と地の間にかかる天の浮橋に立って矛を海につけてコオロコオロとかき鳴らして、それを引き上げる時に矛の先から滴る潮が積もって固まり島となります。こうやって大八嶋国（オオヤシマノクニ、日本列島）が出来上がります。何もない宇宙空間に時空の歪みによってエネルギーが局在し、それが質量を創生するという現代の科学に通じる所があるのが面白い場面です。無から有を創生するのに、いつの時代も同じことを考えるのでしょうか。また何かを始める時には、必ず神々の合議があるというのも面白い場面です。

独神が現れてから、古事記の中では神（島、山、動物に宿るものも含め）、そして人間を増やさなくてはなりません。いきなり相当な数をそろえないと712年の当時に存在した島、山、動物、人間すべてがそろっているという理由が説明できません。神が死ななければよいのですが、古事記の中では神は死ぬことになっています。例えば伊邪那美命は火神を生んでそれが原因で死にます。ですから、古事記の中では何でもありで、産めよ増やせよをありとあらゆる手段を使ってやります。これくらいしないと、すぐに人口は減少に転じるという戒めが書かれているといっても過言ではありません。天上の天つ神に対して地上には国つ神が現れます。この国つ神の神々は、男女で出会えばすぐに子作りをします。美人を見つけた際に「私はあなたと交わろうと思うがどうか？」と問い、女神は「大変喜ばしい話だと思います」と答えて、すぐに事が始まるのです。この程度はまだ現実的で、近親相姦あり、穢れを清めるために洗って神が生まれるという話まで出てきます。

有名な天照大御神（アマテラスオオミカミ）は、伊邪那岐命が死んだ伊邪那美命を追って訪問した黄泉の国から戻り、黄泉の国で染み付いた左の目の穢れを水

で洗ったときに生まれました。鼻を洗ったときに生まれたのが暴れん坊で有名な建速須佐之男命（タケハヤスサノオノミコト）です。そして、この二神が高天原で天の岩戸伝説を繰り広げるのです。

出雲の大神である大国主命（オオクニヌシノミコト）はみんなにいじめられながら、なんとか出世していくという、現代人の好きな波乱万丈物語の原点の主人公であると言えます。大国主命はとてもお人よしで、兄弟神にいいように使われていたのですが、因幡の白兎を助けることにより兄弟を出し抜いて美人で有名な八上比売（ヤカミヒメ）と結婚しました。ところがそれに嫉妬した兄弟神に何度も殺されるのですが、そのたびに別の神に助けられて生き返ります。兄弟神から逃れるために建速須佐之男命の国に行きますが、そこで建速須佐之男命の娘と恋に落ち、はたまた建速須佐之男命にいじめられます。

このように、さまざまな神話が組み合わさって構成されているのが古事記です。このあともいくつかの神話を経て、いよいよ神武天皇の誕生となります。物語として読んでよし、我が国の民族の考え方を探るのもよし、はたまた無と有の哲学を考察するのもよし、これほどさまざまな面をもつ書物はありません。なお、古事記の原文を読み解くのは専門家でもたいへんなので、例えば角川書店の古事記など、解説付きの本を読んでみてはいかがでしょうか。

執筆者紹介

斎藤 秀俊

副学長、物質材料系教授。専門領域は、機能材料工学、水難救助学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『古事記：現代語訳付き』 中村啓信訳注 角川学芸出版（角川文庫） 2009年
1,180円

ブックガイド目次へ